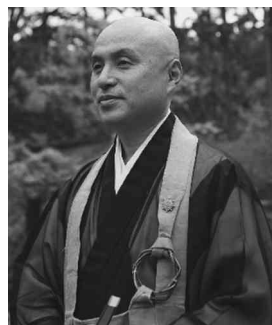


樹木葬

宮城県 禪興寺 住職 梅澤 徹玄



◎はじめに

「山鳥のほろほろと鳴く声きけば

ちちかと思ふははかと思ふ」

これは、飛鳥時代に生まれ、奈良時代に活躍した大僧正行基菩薩の歌である。山深き林に鳴く山鳥の声に、亡き父母を偲ぶ、日本人古来の死生観を象徴する一句である。山川草木国土も含めたすべての自然に、成仏すべき「仏性」を認める思想である。これは仏教発祥の地インドではなく、中国に端を発し、我が国で空海、天台宗を通じて発展し、民衆にも浸透した。

なぜ、鳥類である山鳥の声が、父であり、母であると感じられるのか？ この理屈を超えた感性は、今日多くの日本人にも無理なく理解されるであろう。太陽を拝み、自然を敬う、一見アニミズム（・注1）とも受け取られる行いは、現代日本人が初日の出やご来光を有難く拝む心根に、確かに受け継がれている。

◎「樹木葬」を巡る社会の構造的変化

わが寺は、百万都市仙台に隣接する東北百景「七ツ森」山麓に佇む。山中の湧水が小川となって境内を巡り、沢蟹、ヤマメ、螢が生息する。秋には松島湾から鮭も遡上する自然豊かな山寺である。この地で昨年春より「樹木葬」を開設したところ、思わぬ反響を全国、県内各地より頂いている。そこから窺い知れる現代の宗教事情について少し触れてみたい。

「樹木葬」とは、従来の石造りのお墓ではなく、墓域とされる地面に穴を掘って遺骨を埋葬し、その墓標として樹木を植え、または樹木を目印とする自然葬の一種である。その自然葬の一種である「散骨」は、石原裕次郎の兄の慎太郎が、「海を愛した弟のために、遺骨を海に還してあげたい」と希望した。しかし、当時の法解釈では認められず断念したことで、一躍社会の注目を集めた（・注2）。これが契機となり、その後、「葬

送の自由」を求める動きが加速した。従来の家単位・石造りのお墓の概念に縛られない、多様なお墓のあり方が広がった。一方、少子高齢化社会が到来し、晩婚・未婚化、離婚率の上昇とともに、家代々の墓を守り、次世代へ継承してゆくことの困難さが、社会的に広く認識されてきた。また、現在六十五歳以上となった団塊世代の多くは、地方から都会へ出て就職し、核家族で子育て・教育、マイホーム建設に励み、出世競争に鎗を削ってきた。ようやく手を離れ自立した子供たちは、我が家に戻ることもなく遠方に暮らす。今はローンを完済した夫婦二人の老後生活を送っている方も多い。この多数は、自分達と子供、孫の三代にわたり、家の中に仏壇があったこともなく、実家以外お墓もなく、檀家としての寺と付き合いもなく、定年を迎えた家庭であろう。その意味で、従来の家単位での、家長を中心として伝承されてきた宗教心や先祖供養の心が醸成される機会には恵まれず、地域においてもしかりであった。

こうして、「家」の象徴である「お墓」に対する意識も大きく変わってきた。そもそも現在の家単位の石造りの墓が主流となったのは、高度経済成長期以降である。その歴史は、五十年ほどに過ぎない最近の傾向と思われる。それ以前は家単位の墓地の敷地に土葬をして、自然石の個人墓を建てる埋葬方式も、地方ではいまだ一般的であった。社会全体でみれば、この形式

が主流となり半世紀を経た今日、日本社会の構造的変化により「制度疲労」に直面し、次世代に引き継ぎ、維持することが困難となっているのである。次世代の墓の守り手がいらない、子供があつてもお墓の面倒を掛けたくない等の理由により、新たな墓の建立に躊躇し、回避する人々の模索が始まっている。今や近親者の死去に際し、火葬のみして、遺骨を止むを得ず自宅に保管している方々も多いのが現状である。

◎西行―桜に生き、桜に死す

「願はくは花のしたにて春死なむ

そのきさらぎの望月のころ」『山家集』

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての武士・僧侶であり、漂泊の歌人としてつとに名高い西行法師晩年の詠歌である。西行は、その歌に詠まれた希望通り、陰暦二月（如月）十六日、釈尊涅槃の日に入寂したと伝えられる。陰暦二月中旬は、あたかも桜の盛りの季節である。しかも、十六日がまさに満月（もちづき）にあたった。

師はその歌集『山家集』に明らかなように、生涯桜に魅了され、こよなく愛し、多くの桜に因んだ歌を遺した。中でも、桜の「散る」一点に焦点を定め、思いを込め、仏教の無常観を見事に表現した。古来、日本人が桜を愛し、惹かれ続けてきた最大の理由は、その花の盛りの一瞬の儚さと、散り際の潔さであつたろう。

無常觀に裏付けられた人生のありようの美学と諦觀を、わが身に置き換え、愛おしんだからに違いない。

この世に永遠不滅に形の変わらないものは、何一つ存在しない。この世に生を受けた瞬間から、まっしぐらに死の瞬間に向かつて、ひた走りに時間は止まらない。「生死事大 光陰惜しむ可 無常迅速 時人を俟たず」命に限りあればこそ、一瞬一瞬の刹那に全力を尽くして生きる覚悟が求められる所以である。

◎「竹に上下の節有り 松に古今の色無し」

『五灯会元』

禅語に「松樹千年翠」の一語がある。松は、四季を通じてその翠を保つ。古葉と若葉が入れ替わっても、その翠色は時を超えて一色平等、変わらぬ。子孫繁栄を意味する目出度い一句である。一方、竹は根から竿頭に至るまで青色一色を保ちつつ、節で分かれた歴然として上下の役割分担が存在する。しかし、その役割に優劣、貴賤の区別はなく、松葉の古若もしく、

この世に存在する全てのものは、それぞれ固有の果たすべき役割を与えられ、絶対無二の存在価値を有している。釈尊ご誕生（降誕）の一句「天上天下唯我独尊」である。そのそれぞれの掛け替えのない存在が、もちつもたれつ支え合い、その宇宙全体に広がる無限の関係性が、滔々と時間の流れを超えて、過去から現在、未来へと広がっている。これを「お陰様」と呼び、

手を合わせ、感謝し合う文化を日本人は大切に育て、生きてきた。目に見えるものはもちろん、目には見えねど、その背後で脈々と支え続ける、大いなる生命の連環に思いを致し、慮つてきた。その神々しいまでの恩恵に生かされ、今此処にあることへの感謝と感激こそ、曙光に思わず合掌する私たち日本人の心の真髄ではなからうか。

禅語に「古松般若を談じ、幽鳥真如を弄す」

『人天眼目』とある。時を超えた老松のありようが、姿の見えぬ鳥の囀りが、ありのままそのままで、宇宙の摂理と神秘を一点曇りなく、包み隠さず（露堂々）、見事に指し示しているではないか。その奇跡に理屈抜きで気付くことのできる、生まれながらの心のアンテナ裸の心「仏性」を誰もが等しく頂いて、この世に生まれ来ている。その一点において、個々の絶対的存在価値を超越して、すべての存在は平等である。

◎諸行無常 諸法無我

と同時に、その個々の形態は時々刻々変化し続けて、二度と同じ瞬間・状態は戻らない「諸行無常」。なぜならすべての存在は、時々刻々変化し続ける無限の関係性によって成り立っている（重重無尽）から、その一瞬の姿、状態、関係は仮の姿のさながら「奇跡」であって、決して永続できない道理である。「因縁仮和合」因とは、それがなければ何も始まらない大前

提^てススタート地点。それに無数の御縁が重なり合つて、ようやくたつた一つの「あたり前^{あたりまへ}」奇跡^{きせき}」が成り立っている。その「あたり前^{あたりまへ}」が無数に重なり合つて、ようやく物事は、あるべきよう「あたり前^{あたりまへ}」に成り立っている。しかし、それも所詮^{しよせん}は仮の姿だ。すべては、ご縁の積み重なりによつて私の掌にお預かりした「お預かりもの」に過ぎない。ご縁が尽きたら、即刻、無条件、問答無用に、この命も身体もすべてを含め、社会、仏様、ご先祖様、地球、宇宙にお返しして、結局私の掌には何も残りませんでした、と合点せねば仕方がない「諸法無我^{しよぼうむが}」。

これを般若心経では、「色即是空^{しきくはくう} 空即是色^{くうくはしき}」と説く。色とは、目に見える形のあるもの。空とは、実体のない目に見えないもの。これらは畢竟^{ひつきやうひより}表裏一体^{いつたい}、時々刻々入れ替わり、立ち代り千変万化して流転する。その変化し続けることだけが、唯一変わらぬ永遠不滅の真理なのだと、仏陀（釈尊^{ぎやうそん}）は曙光^{しやうくわう}一目喝破^{いちもくくわつぱ}された。「身心脱落^{しんしんだつらく} 大悟徹底^{たいごてつてい}」（・注3）

◎おわりに

わが「七ツ森樹木葬」に埋葬された方々の約半数は、ご希望により「散骨」方式によつて埋葬されている。約二十年ほど前、米寿で亡くなった寺の祖母の骨上げ後、棺の台座に残る灰骨を本堂脇の沙羅（夏椿）の根元にカルシウムの肥やしとして埋けてみた。すると翌

年から二十有余年後の今日に至るまで、誰もが驚くほどの樹勢を誇り、見事な無垢^{むく}の純白な花卉を開いては、散つてゆく。「骨」という個人^{こたわ}の形のあるものへの拘^こりを捨て、大地へ還り、他の生命の栄養となる。それは大いなる命の連環の中で、永遠のいのちを生き繋いでゆく選択と、言えるのではないか。

「色即是空^{しきくはくう} 空即是色^{くうくはしき}」の当体^{たうたい}（・注4）であらう。

お経の「経（スートラ）」とは織物の縦糸を意味する。縦糸は織り上がれば、表面からは目に見えぬ。しかしそれなしには、成り立たぬ物事の根幹を成す必要不可欠な存在である。機織りを生涯の趣味とした故郷の亡き母の姿が偲ばれる。私自身の命の根元に直結する、時空を超越した大いなる命の流れの「おかげさま」に思いを致す場が「墓」であらう。それが、樹木であっても良い。七ツ森山麓に日本三大桜の一つ、福島県三春の滝桜（樹齢七百年とも千年ともいわれる）の実生^{じしやう}（・注5）の木々が枝葉を広げ、新たな命を未来へ繋いでゆく（・注6）。

（完）

* 注1—呪術・宗教の原初形態の一つ。自然界のあらゆる事物は、

具体的な形象を持つと同時に、それぞれ固有の靈魂や精霊などの靈的存在を有するとみなし、諸現象はその意思や働きによるものと見なす信仰（「廣辞苑」）

* 注2—現在では一九九一年の法務省の見解により条件付きで認められている

* 注3—（仏）身も心も一切の束縛から解放されて絶対的な自由を獲得すること（「廣辞苑」）

* 注4—（仏）事物自体、事物そのものの（「廣辞苑」）

* 注5—草木が（接ぎ木・挿し木等に依らず）種子から芽を出して成長すること。また、そうした植物 みおい、みばえ

* 注6—<http://zenkoji-ijumokusun.com>